発達理論の学び舎

Back Number: Vol 216

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

4301.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンで見舞われた異常知覚
4302.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在の二日目の計画
4303.【バルセロナ・リスボン旅行記】浄福さの中へ溶け出して
4304.【バルセロナ・リスボン旅行記】死の連続性の証明について
4305.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンに対する既視感
4306.【バルセロナ・リスボン旅行記】国立古美術館を訪れて
4307.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン海洋水族館に向けて
4308.【バルセロナ・リスボン旅行記】絶え間ない勉強：就寝前に思い出す今朝方の夢
4309.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在三日目の早朝に想うこと：旅の意義とその性質
4310.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンの早朝の雰囲気と今朝方の夢
4311.【バルセロナ・リスボン旅行記】形を音に・音を形に
4312.【バルセロナ・リスボン旅行記】仮眠中のビジョン：「ありがとう」の発音
4313.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン海洋水族館を訪れて
4314.【バルセロナ・リスボン旅行記】抑圧された後悔と作曲実践
4315.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在四日目の朝に
4316.【バルセロナ・リスボン旅行記】オーケストラに所属し、脱退する夢
4317.【バルセロナ・リスボン旅行記】仮眠中のビジョン
4318.【バルセロナ・リスボン旅行記】ファド博物館を訪れて
4319.【バルセロナ・リスボン旅行記】作曲上の写経実践と大学入試数学の学習との類似性
4320.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在五日目の朝に思うこと

© YOHEI KATO 2019

4301.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンで見舞われた異常知覚

「よく寝たな」と思って目覚めてみると、深夜12時だった。就寝したのはその二時間前の午後10時過ぎであったから、二時間弱しか寝ていないことになる。さすがにそれでは睡眠が少ないだろうと思って再度寝ると、今度もまた「よく寝たな」と思って目を覚ました。すると、深夜一時半であった。それ以上寝る必要性を一切感じなかったため、そこで起床することにし、今は午前二時を迎えようとしている。

今回のバルセロナ・リスボン旅行においては断食をしているわけではないのだが、端的に述べれば、知覚が異常である。特に昨日から今日にかけての知覚は異常であり、体験したことはないのだが、覚せい剤や向精神薬を摂取したのではないかというぐらいに中枢神経系が高ぶっているのを感じる。脳内の何かしらの物質が異常に分泌されているのを感じ、今朝も目覚めの前に多種多様なイマージュが知覚されており、目を閉じたまましばらくそれを観察していた。

実は深夜12時に目覚めた時に、そうした異常な知覚現象を冷静に受けて止めており、デスクの上に置いておいた裏紙に走り書きをしておいた。部屋の明かりを点けることなく、暗闇に包まれた部屋の中でそのメモを書き、今改めてそれを眺めている。メモによると、「千変万化するビジョンが怒涛の流れとうねりを持ち、それが自分の内側に流れ込んでいる」という体験をしていたようだった。そしてその一行の下に「⇩」のマークがあり、補足説明がなされている。

それを読むと、「ガウディ、ピカソ、ダリ、ミロのXX（識別不可能）、そしてバルセロナ、リスボンのXX（識別不可能）が流入」と書かれている。識別不可能な文字に関して少し考えてみると、おそらく意味合いとしてはどちらも共に、「固有の感覚」という言葉が当てはまるのではないかと思う。言い換えると、上述の芸術家の固有の感覚と、バルセロナとリスボンの街の固有の感覚が、全て一つの統合的なまとまりになることに向けて、一旦ごちゃごちゃに混ざり出し、その混ざりが激しく進行している様子が怒涛の流れとして知覚されているのではないか、ということである。この説明はおそらくかなり正しい。それらの芸術家と両都市の固有の感覚が、一旦自分の内側で全てごたまぜになり、それが一つの統一的なものに向かって動き始めている激しい運動を感じる。自分の内側に起こっているのは、この激しい運動なのだ。それを理解した時、今朝方の体験が単なる異常な知覚現象ではないことに安堵する。

これは決して自我が肥大化した形で述べているわけではないが、私は多分に知恵遅れな点がありながら、時々自分の脳が通常の働きよりも体感覚として1万倍ほど早く回転しているような感覚に陥ることがある。今朝の早朝未明もまさにそのような現象だった。

この感覚は表現しにくいのだが、仮に目の前に現象Aが起こったのを知覚すると、そのAという現象を生み出したこの現実世界の無限の因果律をどこまでも広く深く一瞬にして辿っていくことが可能になるような感覚がするのである。例えば、自分の腹が鳴ったら、実はそれは鎌倉時代の自分の先祖が屋根の瓦で足を滑らせたことが原因だったというように。一見すると、両者の現象間に因果関係を見出すのは荒唐無稽なことのように思えるのだが、よくよく因果律を辿ってみると、今この瞬間に自分の腹が鳴っているのは、本当に先祖が鎌倉時代に家の瓦で足を滑らせたことに原因の一端があることが直感把握されるような感覚がするのである。

これは一例にすぎないが、こうした因果律や論理の把握のみならず、他の実践活動においてもこうした異常な感覚が何かしらの形となって現れることが時折ある。今朝の異常知覚も、今回の旅がこれまでの自分の蓄積と出会い、それを刺激することによって生み出されたものなのかもしれない。今日はこの感覚をもう少し観察する必要がありそうだ。リスボン：2019/5/3（金）02:04

No.1911: Elementary Geometry

When I got up 2:30AM, I thought that I would learn and apply elemental geometry to my music composition. Lisbon, 05:48, Saturday, 5/4/2019

4302.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在の二日目の計画

時刻は早朝の二時を迎えた。この時間帯はとても静かである。リスボンの街の落ち着きは、バルセロナ以上であり、とても好感が持てる。

今、ホテルの自室には、ポルトガル生まれの作曲家が作ったピアノ曲が流れている。リスボンの街の陽気さとは少し異なる感覚をこれらの曲は持っており、どちらかというと優しさのような感覚を内包している。聴いているCDのタイトルは、“Portuguese Piano Music”というものである。ピアノ演奏は、Sofia Lourencoというピアニストが務めているようだ。

リスボンに滞在中に、ぜひとも街の楽譜屋に足を運び、ポルトガル出身の作曲家の楽譜を購入したいと思っていた。しかし残念ながら、リスボンの街には楽器屋はたくさんあっても、楽譜を扱っている専門店はないようである。バルセロナとリスボンの街に残念さを感じるのはこの点だろうか。

一昨日、昨日と、人間を屑や家畜とみなすような趣旨の日記を書き留めていたように思う。その観点で言うと、現在宿泊しているホテルに滞在している客はどれも、自らを屑や家畜のような人間だと自覚している人たちのように思える。そうした冷静かつ謙虚な判断のできる知性を持った人たちが宿泊しているためか、このホテルではとても静かな生活を送ることができている。もちろん、このホテルの防音対策がしっかりしているというのも一因だろうが、騒音で目が覚めるということがないことは有り難い。

バルセロナで宿泊したホテルもリスボンのホテルと同じく四つ星のホテルだったのだが、そこの宿泊客は上記のような自覚がないのか、低音がやたらと響くロック音楽を深夜にかけている輩がいたし、私が起床する深夜3時ぐらいに、上機嫌に大きな声で歌を歌いながら廊下を歩く輩もいた（この輩には申し訳ないが、彼の行為は人様に迷惑をかけているため、知性の欠落した人間だと思った）。現在のリスボンのホテルにはそうした輩が宿泊しておらず、とても落ち着きのある快適な滞在が確保されている。これについては何よりも感謝をしたい。

リスボン滞在の二日目の今日から本格的な観光を始める。今日の観光の主たるものは、国立古美術館を訪れることである。この美術館は、17世紀に建てられた宮殿を改装し、1884年に設立されたポルトガルを代表する歴史ある美術館とのことである。館内は広く、12世紀から19世紀にかけてのポルトガル芸術の作品が充実しており、大航海時代にポルトガルが世界各国から集めた品々が展示されているとのことである。

一つ一つの作品をじっくり味わいたいと考えていることと、今日も最高気温が28度に達するとのことなので、ジェロニモス修道院やベレンの塔といった世界遺産に足を運ぶのは今日ではなく、最終日の月曜日にしようと思う。国立古美術館へ行く際にメトロが使えるのか調べてみたところ、メトロの駅はそれほど近くになく、バスで移動することになりそうだ。リスボンはバスやトラムが発達しており、メトロに乗るカードでそれらの交通機関も利用できる。

© YOHEI KATO 2019

ちょうど昨日、リスボンの国際空港の駅で切符を購入した時、それらの交通機関を利用できるスイカのようなカードを購入することになった。今日の午前中はホテルの自室で過ごし、作曲実践と写経実践に力を注ぎ、一旦仮眠を取ってから昼過ぎにホテルを出発したい。一日一食生活を旅先でも行っていることもあり――果物だけ朝に食べているが――、多くの観光客が昼食を摂っている間に観光できるというのは何かと便利である。美術館を巡る際にも不要な混雑を避けながら鑑賞することができる。

今回リスボンで訪れる美術館の中でも、今日訪れる国立古美術館の所蔵作品の数は多いようであるから、昼過ぎから夕方にかけてゆっくりと作品鑑賞を楽しみたいと思う。こうしたこともあり、今日はやはり世界遺産に足を運ばない方が賢明であろうと判断した。

美術館に行く前に、まずは最寄りの地下鉄駅に行き、スイカのようなカードであるViva Viagemにチャージする。チャージできる金額は3、5、10、15、20ユーロ(それ以上の金額もある)から選べる。残りの滞在期間に何回交通機関を利用するつもりなのか、しかもそれは地下鉄を利用するのか(1回1.5ユーロ)、バスを利用するのか(1回2ユーロ)を考慮してチャージの金額を決めたい。

今のところ、今日はバスに2回乗り(合計4ユーロ)、明日はメトロに2回乗り(合計3ユーロ)、明後日はメトロに1回乗り(合計1.5ユーロ)、明々後日はバスに2回乗り(合計4ユーロ)、最終日は最寄駅から空港駅までにメトロを1回乗るため(合計1.5ユーロ)、全て合わせると合計で14ユーロであるため、15ユーロほどチャージすればいいだろう。カードへのチャージが終わり次第、国立古美術館に向かい、そこで作品を十分に観賞した後、昨日偶然発見したビュッフェ形式のレストランにバスで向かい、今日も夕食をそこで摂り、腹ごなしとしてレストランからホテルまでは歩いて帰る。リスボン:2019/5/3(金)02:54

No.1912: Sunbath in the Early Morning in Lisbon

I'm sunbathing in the early morning in Lisbon. It is very pleasant, and it stimulates my vital energy. I'll go to the Lisbon Oceanarium in the afternoon. I look forward to the encounter with various marine species. Lisbon, 07:40, Saturday, 5/4/2019

4303.【バルセロナ・リスボン旅行記】浄福さの中へ溶け出して

時刻は午前七時に近づきつつある。先ほどホテルの自室の窓を開けた時、小鳥の鳴き声が一斉に部屋に流れ込んできた。私の全身は小鳥たちの鳴き声にただちに包まれ、浄福さの中に溶けていった。

本当に幸せだ。今、このようにしてリスボンの街でこのように生きているというただそれだけのことが、本当に幸せだと感じさせてくれる。このように毎日を生きていけばいいのだ。このようにして自分の人生の一瞬一瞬の瞬間を生きていけばいいのだと感じさせてくれる。

「このように人生を生きていいのだろうか？」と問うと、目の前の世界が静かにうなづいているかのようである。そのように生きていいのだ。このようにして毎日を、日々の瞬間瞬間をこのように生きていいのである。

リスボンの街は、自分の現世的な活動における励ましと促しをもたらしてくれるのみならず、浄福さを通じて、超越的な世界と絶えず自分を結び合わせる形で毎日を生きるきっかけを与えてくれたように思う。繰り返し何度でも述べておきたい。今、この瞬間の私はこれ以上にないほどに幸せだ。

起床直前から起床後にかけて現れた異常知覚の余韻はまだあるものの、それは随分穏やかなものになった。ひょっとすると、先ほどの異常知覚は、幸福さへの入り口、ないしは絶対的必要条件なのかもしれないと思わされた。

今ここという瞬間に浄福さを見出し、浄福さの粒子の中に存在を溶け込ませていくためには、あの異常な知覚を通じてこの現実世界を見通す必要があるのではないかと思わされたのである。ここではもちろん、幸福さを感じるためにあのような異常知覚がなければならないと述べているのではない。ただし、幸福さのベールに包まれた究極的な幸福さの核に至るためには、あのような異常知覚を用いて、ベールを、ないしは幸福の核を覆う殻を打ち破っていく必要があるのではないかと思う。人間にとってそれを行わなければ、究極的な幸福感、あの世の中に溶け出し、あの世を超えて、あの世からこの世を生きようとする瞬間に生まれるとろけ出す浄福さを感じるためには、今朝方のような異常知覚の矢が必要であり、同時にそれは人間であれば誰でも獲得することができるものなのだと思う。

リスボンに滞在することになった目には見えない目的は、それに気づくことだったのかもしれない。そしてそれに気づくだけではなく、直接体験として、異常知覚を通じて浄福さの核の中へと溶け出していくことだったのかもしれない。とにかくその計らいと導きに感謝をしたい。そして、今この瞬間のいかようにも表現できぬ浄福さに感謝の念を捧げたい。

リスボン滞在の二日目にして、私は早速この土地の土着神から貴重な贈り物を受け取ったように思う。リスボンという街は、私にとって何か特別な存在に思えてきた。

今日もこの街をゆっくり歩くことによって、この街と自分自身との深層的な関係を少しでも紐解きたい。私はこれからの人生をもしかすると、オランダ、ノルウェーかフィンランドの森の中、そしてリスボンという三つを生活拠点にして生きていくかもしれない。

この人生は、それらの場所に行き着き、それらの場所の往復によって生涯を閉じる運命にあったのではないかと思わされる。リスボンの早朝に小鳥たちの清らかな歌声が、いと高きところに向かって上昇し、そしてそれが地上に届けられる。リスボン：2019/5/3（金）07:09

No.1913: Lisbon After Sunset

The third day to stay in Lisbon is now approaching the end. I didn't go to any museums today, but instead I visited an aquarium that gave me a different type of stimulus. Lisbon, 21:09, Saturday, 5/4/2019

4304.【バルセロナ・リスボン旅行記】死の連続性の証明について

実は今日は起床直前に、死の連続性について考えていた。結局私たちは、死というものを生の一瞬一瞬と切り離すことはできず、そうであるならば、死が訪れる瞬間から今にかけての瞬間は連続的な一つの流れであり、生は即死となり、死は即生になるという関係性があるのではないか、という考えが芽生えていた。確かに、物理的に脳の活動停止や心肺機能の停止などによって死の瞬間を同定し、その前後をもって生きている状態と死んだ状態に分けることは可能かと思う。だが、死の本質は何かそのように明確な区切りを設けることによって定義されるようなものではなく、「非定義化」を進めていくことによって定義されるものであるように思う。それはまさに自己を定義付ける際に行

われるのと同じ方法が必要とされることを意味している。私たちが自らの自己を定義しようとするとき、「私は〜な人間である」といくら述べても、究極的な定義には至らない。

A. H. アルマースが開発した、霊性の探究手法であるダイアモンド・アプローチにおいて、“Who are you?”という問いを何度も繰り返し、その問いに言語を用いて回答を続けていくと、ある時点で回答がピタリと止まる瞬間がある。その瞬間、私たちは言語では捉えられない自己の本質に触れ、静謐さの中にくつろぐ。まさにここで行なわれていることは、言語が持つ分節化機能を極限まで活用し、その機能が麻痺した瞬間に立ち現れてくるものが自己の本質であるという証明方法なのだ。ダイアモンド・アプローチにはその他にも自己探求的方法が無数にあり、私がジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃は、この手法に関するクラスを履修し、その時の体験をふと今思い出したのである。

言語の分節化作用を麻痺させ、それによって自己の本質を明るみに出すという証明方法と同じことが、死の本質に至ることにも転用できるということにハタと気づかされたのである。死の本質というのも、自己の本質と同様に、言葉ではいかようにも擬似的定義を施すことができる。だが、それをいくら行ったとしても、それは究極的な定義に至ることはできず、定義の中に自己が溶け出し、死の定義と自己が一体化することはない。森羅万象の本質的な定義を見出すとき、私たちはほぼ間違いなくその定義と同一化する。その感覚が得られなければ、見いだされた目の前の定義はまやかしであり、幻影である。そのようなことが言えるかと思う。

早朝の二時頃に目覚めた今日の私は、なぜ起床直前から死の連続性について考えていたのだろうか。その理由は全くもって定かではない。リスボンでの滞在は、やはり自分にとって何か大きな意味を持っているようだ。

リスボンの二日目の早朝はとても穏やかであり、小鳥たちの鳴き声が美しく街に鳴り響いている。それは街のみならず、私の心の湖面にも響き渡っており、この人生における瞬間瞬間を生きるために不可欠な、優しい波紋を湖面に生み出している。リスボン：2019/5/3（金）07:25

4305.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンに対する既視感

時刻は午前九時を迎えた。今日もリスボンは晴天に恵まれ、初夏のような一日になるようだ。

早朝に感じていた浄福さがまだ内側に残り続けている。このような浄福さを感じられること、この感覚の中に自分が生まれてきた意味と生きる意味を見出すことができるかもしない。そのようなことを考えていると、こうした浄福さを感じさせてくれるために自分を産んでくれた両親に、今途轍もなく大きな感謝の念を抱きざるをえない。これまでの人生にあったこと、これからの人生にあるであろうことなど関係なしに、生の絶対的な肯定がこの浄福さの中にある。

この浄福さの中で日々を生きていけばいいのである。それが自分という一人の人間の究極的な生き方なのだと気づく。このように人間としてのつかの間の儚い人生を生きられることに最大限の感謝をしたい。今はそうした感謝の念で一杯だ。

リスボン上空の太陽が地上に優しい光を届けている。今日はこれからこの太陽の光がより強さを増していくであろう。

昨日も感じていたことなのだが、リスボンで滞在している現在のホテルの部屋に入った瞬間と、自室から街を眺めた瞬間に、既視感（デジャビュ）があった。そうした既視感は今でもまだ続いている。私は前世かどこかでリスボンに来たことがあったのだろうか。あるいはこの街に住んでいたことがあるのだろうか。そのようなことを思わざるをえない。

今日はこれから再び作曲実践をして、それに合わせて写経実践も行っていく。二つの実践は毎日着実に進行していく。そうした進行に合わせて、作曲技術および自己自身を深耕させていく。浄福さの中でそうした深耕を水の流れる如く進めていけばいいのである。そうした生き方に絶対的な幸福感と安心感を見出している自分がいる。ここに自分の人生があり、自分の人生に対する絶対的かつ無条件的な肯定感がある。それを元に今日からまた毎日を生きて行く。

旅行中はミネラルウォーターを買って良く飲んでいるためか、いつも以上に肌の調子が良い。確かにフローニンゲンでの生活においても、毎日水を十分に飲むようにしている。その際は浄水ではなく、BRITAを使った水を飲んでいるが、旅行中の肌の調子の良さを考えると、今後はより水を飲む量を増やしてもいいかもしれないと思う。フローニンゲンに帰ってからは、これまで飲んでいたココアやヘンプパウダードリンクなどの色の着いたものを飲む量を少し減らし、もう少し水を飲む量を増やしたい。旅を通じて自分の身体の様子を観察していると、そのようなアイデアが浮かぶ。

これから新たに一曲を作ったら、ホテル近くのバス停から国立古美術館までの道筋を確認し、さらには国立古美術館から昨日訪れたビュッフェ形式のレストランまでの道筋を確認し、それらの地図をPDF化しておきたい。レストランからホテルまでの道筋は複雑ではなく、もう頭に入っているため、そのための地図は必要ない。正午過ぎにホテルを出発し、まずは最寄りの地下鉄駅で公共交通機関を利用するためのカードを15ユーロ分チャージする。その後、バスに乗って美術館に向かう。

美術館で三時間から四時間ほど過ごしたら、レストランに向かい、早めの夕食をゆっくり摂る。そしてレストランからホテルに戻ってくる帰り際に、ホテル近くのスーパーに立ち寄って、1.5Lのペットボトルの水を2本ほど購入したいと思う。今日もまた充実感と幸福感に満ち溢れた日になるだろう。リスボン:2019/5/3(金)09:22

4306.【バルセロナ・リスボン旅行記】国立古美術館を訪れて

リスボン滞在の二日目が幸福感のうちに終わりに向かっている。リスボンで味わっているこの幸福感を形容するふさわしい言葉は何かないかと模索しているのだが、それが見つからない。見つけようとすると、その幸福感が言葉を避けるかのように、いや言葉よりも素晴らしいものがあるということを私に教えようとせんばかりに、幸福感が自己を溶かしていく。

時刻は午後の七時を過ぎた。リスボンの太陽はまだ沈まない。

今日は計画通りに、正午過ぎにホテルを出発し、国立古美術館を訪れた。道中バスで海岸の方向に向かっていく際の景色は格別であった。昨日に引き続き、初夏のような今日の太陽は、海面を輝かせ、その輝きは実に眩しかった。

国立古美術館に迷うことなく到着した私は、すぐにチケットを購入した。リスボンは物価が安く、それが美術館の入場料にも反映されており、大人のチケットはわずか6ユーロであった。地下階も合わせると、全部で四階のフロアからなるこの美術館はなかなかの見ものであった。ただし、所蔵作品の半数は、中世のポルトガルの絵画や彫刻などを扱っているため、キリスト教系の芸術に関心がなければ、少し物足りなさを感じるかもしれない。

私自身も、なんとか自分の関心の幅を広げようと思って宗教芸術などに接してみようとするのだが、中世の宗教芸術はどうしても存在の奥にまで入っていかない。後光の差す人間や天使などは、シンボルとしては面白いのだが、それらに存在が鷲掴みにされるかというと私は全くそうではない。そうした作品はあまり真剣に向き合う気にもなれず、無理をして真剣に向き合う必要もないと思うので、鑑賞する足取りを少しゆっくりにする程度にして、そうした作品を一瞥していった。

宗教芸術の作品に対して感銘を受けることはほとんどなかったが、他のジャンルにおいては私を強く引きつけた作品群があった。それはポルトガルと貿易をしていた日本に関する所蔵品であり、桃山文化の屏風絵が飾られている部屋ではソファに腰掛けて、じっくりと所蔵作品を見ていた。その他にも、今回私が意外にも強い関心を示したのは中国製の陶磁器であった。陶磁器というものがここまで美しいものだとはこれまで認識しておらず、今日陶磁器に対する目を見開かせてくれたような体験を積ませてもらった。

そうしたことから、一番私が時間をかけて鑑賞していたのは、桃山文化の屏風絵や陶磁器が置かれた二階の作品群だったと思う。絵画作品で一点だけ強い感銘を受けたのは、オランダの画家ヒエロニムス・ボス（ボッシュ）の『聖アントニウスの誘惑』という作品である。これはどこか、人間の無意識の世界から汲み取ったものを見事に表現しており、バルセロナで見たピカソ、ダリ、ミロなどの作品を数百年ほど先取りしたようなものではないかと思わされた。

この美術館についてはその他にも書き留めておきたいことが幾つかあるが、作品を鑑賞している最中、私はやはり人間が絵画や陶磁器、さらには装飾品を含め、見事な形を生み出すことについて関心を持っていた。人は何に魅了されて形を生み出すのか。その点に関心の焦点が向かっていた。またそこから派生して、形あるものを鑑賞する中で、音楽的なものがアフォーダンスされてくることにも気づき、今後私はやはり、形ある芸術作品から喚起される音楽的なものを何としても自分の曲として形にしたいと思った。

今日はこれからゆっくりと入浴をし、その後作曲上の写経実践に打ち込みたい。リスボン二日目はまだ終わらない。リスボン：2019/5/3（金）19:35

4307.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン海洋水族館に向けて

今日は正午に国立古美術館を訪れた時、時間が時間だけに、館内は混んでおらず、非常に落ち着いて所蔵作品を眺めることができた。もちろん美術館によりけりだと思うが、明日からもランチタイムのあまり人がいない時に館内に入場して落ち着いた鑑賞をしていこうと思う。

明日ものんびりと昼過ぎにホテルを出発し、リスボン海洋水族館へ行く。バルセロナとリスボンの今回の旅のみならず、基本的に私が旅をする際には、美術館や博物館を巡ることが多く、たまには生物を見たいという思いが高まっていたため、今回はリスボンの海岸沿いにある大きな水族館に行くことにした。今朝方この水族館について何気なく調べていたところ、世界水族館ランキングなるものがあり、何とこの水族館は数年間連続して首位を取得しているようなのだ。この水族館には、およそ500種類ほどの海の生き物たちがいるらしく、様々な海洋生物たちに必ずや癒されるだろう。

ふと気づけば今日は金曜日らしく、明日は土曜日とのことなので、水族館が混むことが予想される。明日の早朝に、オンラインを通じて事前にチケットを購入しておきたいと思う。

明日は正午までホテルの自室で作曲実践と作曲に関する学習に励み、さらにはバルセロナで購入した画家の文献資料の再読を行っていく。こうしたことを行っていると早朝の三時あたりに起床してもあっという間に昼の時間になる。だが、早朝から昼まで八時間ほど自分の勉強や実践に充てることができていることは本当に充実感をもたらしてくれ、昼以降からの生活にゆとりがもたらされる。今習慣化されている時間帯にこれからも起床し続けることができるのであれば、365日旅をしていても仕事には支障が出ない。

もちろん、今後も自分を呼んでくれた場所にだけ旅に出かけていくことにしていくが、どこで生活をしようとも母国と関連のある仕事はできるし、自分のライフワークに取り組むこともどこにいてもできる。そのようなことを改めて感じる。

今日は国立古美術館を訪れた後に、昨日訪れたビュッフェ形式のレストランに早めに行った。午後三時前にレストランに入り、早めの夕食を食べることにした。時刻はまだ午後三時前だったのだが、レストランの人気ぶりは凄まじく、少しだけ待ったが、比較的速やかに席に案内してもらった。そこから私は一時間以上の時間をかけ、野菜を中心に一日一食の夕食を満足のいくまで食べた。

ほうれん草のスープから始まり、様々な野菜をたくさん食べることができ、非常に満足している。レストランからホテルまでは歩いて30分弱かかるのだが、食べてひと休憩して、そこからいつもより遅く歩きながら腹ごなしの散歩を楽しんだ。その時間帯の西日は強く、途中、木陰で休みながらホテルに向かっている最中も、なんとも言えない幸福感が私を包んでいた。

リスボンには光で作られた道が無数にある。そのようなことをふと感じさえてくれる木漏れ日が、木陰に差し込んでいた。

明日は水族館を十分に堪能し、夕食は今日よりも一時間遅く午後四時頃から食べ始め、五時過ぎまで時間をかけながらゆっくりと食べようと思う。明日はどのような海洋生物に会えるのか、今からとても楽しみだ。リスボン：2019/5/3（金）19:54

4308.【バルセロナ・リスボン旅行記】絶え間ない勉強：就寝前に思い出す今朝方の夢

時刻は午後の九時半を迎えた。リスボン滞在の二日目が今終わりを迎えようとしている。リスボン初日と同様に、今日もまた非常に充実した一日だった。これは何も旅という非日常的な生活空間の中で生きていることからもたらされたものではなく、いついかなる時も日々を充実した形で過ごすことができるようになっていること。その事実に目を向けていく必要がある。

今、作曲上の写経実践を終えた。今回の旅の最中の隙間時間を使って、“Melody Writing and Analysis (1960)”の譜例を作曲ソフト上で再現するという写経実践を行っており、明後日あたりに全ての譜例を写経し終えることができそうだ。旅から帰ったら、同様の実践を他の理論書に掲載されている譜例に対して行っていく。これは何も作曲に関することだけではないが、一に勉強、二に勉強という姿勢をこれからも持ち続けていく。

私はまだ何も深く学んでいない。学べば学ぶだけ対象領域の深さを思い知り、同時に気がつけば対象領域が拡張されていくという日々を毎日生きている。幅も深さも際限がないことを知っているが、それを知っていたとしても、あるいは知っているがゆえに、いついかなる時も絶えず勉強をし続けていこうと思う。

そういえば今日は、今朝方の夢について振り返っていなかったように思う。昨夜は十時過ぎに就寝し、深夜二時ぐらいに起きたため、夢という夢を見ていなかったように思うし、また夢を見ていたのは随分と前のことであるから、覚えている範囲のことを書き留めたいと思う。

夢の中の私は、おそらく小中学校時代の親友の誰かと話をしており、その中で親友が私に何か助言を求めていた。それが何に関するものかは覚えていないが、助言の対象領域は私の専門とも重なっており、あながち見当違いな助言はしていなかったように思う。だが一方で、その助言がどれほど有益だったのかについては定かではない。もう一つ覚えているのは、夢が夢としての形を取る前のモワッとしたビジョンの塊を見ていたのを覚えている。

それはこれから夢になろうとしている原形であり、無数のビジョンがうようよと動いているような姿をしていた。それは実に様々な色とイメージで構成されており、その塊を額あたりの通称「第三の眼」と呼ばれる部分を通じてぼんやりと眺めていたのを覚えている。

今朝方の夢について覚えているのはそのくらいだ。今日は明日に備えてそろそろ就寝に向けた準備をする。明日の起床前には何かしらの夢を見るであろうという予感があるため、夢を書き留めるメモを準備しておきたい。明日の明け方に見る夢、そして明日そのものに対して期待感がある。そうした期待感と共に就寝し、明日も充実した一日としたい。リスボン:2019/5/3(金)21:42

4309.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在三日目の早朝に想うこと:旅の意義とその性質

リスボン滞在の三日目の朝を迎えた。辺りは静寂と闇に包まれており、その中に自己が一つの光の点のように浮かんでいる感覚がする。起床直後の今の感覚を表現すると、そのように言える。

今朝は午前二時半に起床し、今はまだ三時前である。どうやら一日一食生活を始めたことにより、胃腸がたった一度しか働かなくて済むことによって、無駄に睡眠を取る必要がなくなったらしい。そのおかげで私はこれまで以上に早起きができるようになり、それでいて睡眠の質も申し分ないために、一日の活動を十二分に行うことが可能になっている。リスボン滞在の三日目の今日もとことん充実したものになることが、起床して間も無くの今この瞬間にわかることが嬉しい。

今回の旅を通じて、旅の意義を改めて実感している。それは間違いなく既存の自己を押し広げ、時の発酵過程の中に自己を置き直し、自己を深めていくことを促していく。そうしたことを実感しながら、今後の旅はこの世界のどのような場所に、そしてどのようにそこへ行き、いかようにそこで過ごすかについても考え直している最中である。

自らの旅は自らの旅を通じて発達を遂げていく。己の旅というのは、旅を通じて変貌していくのである。そうした変貌が起こらないのであれば、それは本当の旅をしていないのだろう。自らの旅は、それが真なるものであればあるほどに、旅を通じて自ずから発達していくものなのだ。

自分の旅が発達し、変貌を遂げ、深まっていけばいくほどに、旅の意義が同じであることはありえない。また、旅先や旅先での過ごし方が変容していくのもしかるべき事柄である。

旅は、旅をすることを通じて自発的に深まっていくものであるということを今回の旅を通じて実感している。その点において、今回バルセロナとリスボンを訪れることができた幸運に感謝しなければならない。バルセロナとリスボンに滞在することができたことが幸運であっただけではなく、それらの都市が自分に幸運そのものを運んできてくれたとも見ることができる。ここにおいても旅と同様に、幸運が幸運を運んでくるというプロセスを見出すことができる。

幸運の連続の中に差異があるというのは、まさに発達の本質ではないだろうか。発達というのは、連続と差異によって成り立っているというのは周知の通りであり、それは発達の原理の一つである。ある旅が次の旅に向かって連続的に流れていく中で、二つの旅の間には差異が生まれる。その差異は、さらに次の旅への連続性を生む潤滑油でありながら、同時に全体としての旅を変容させていく根源でもありうる。旅が進行し、旅が深まっていく過程の中で、旅をする主体としての自己が変容し、深まっていくというのは本当に興味深い事柄である。

この世界に世界があるというのは、いや、この世界に様々な場所があるというのは、その人にふさわしい旅というものへ私たちを誘うためなのかもしれない。この世界に様々な場所があり、様々な土着神がいて、様々な風土と文化が存在しているのは、私たちを旅に誘い、私たちに変容を経験させるためなのかもしれない。リスボン滞在三日目の今日は、まさにそうした経験の一端を担うものになるだろう。リスボン：2019/5/4（土）02:59

4310.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボンの早朝の雰囲気と今朝方の夢

時刻は今早朝の三時を迎えた。換気のために今窓を開け、少しばかり外の景色を眺めてみた。

空を見上げると、早朝の空に星々が輝いている姿を見た。目の前に見える美しい輝きは、星が死滅した瞬間に発せられた光であることをにわかに信じることはできないが、そうした事実を知って星を眺めてみると、また違った感動がそこにある。命の連鎖がそこにあるように思うのだ。星は星としての役割を終え、役割を全うした際に発せられる光をその瞬間の自分に届けてくれている。そのようなことを思って星を眺めると、これまでとは違った感覚や感情が自分の内側から滲み出す。

リスボンの時間の流れはバルセロナよりも緩やかである。その緩やかさはフローニンゲンともまた異なる。フローニンゲンはオランダの首都ではないし、政治経済的な発達はそれほどではない。一方リスボンはポルトガルの首都であり、政治経済的な機能の中心を担っている。そうした街でありながらも、こうした落ち着きとゆとりを持っているというのは立派なことである。

ホテルの自室から外を眺めると、早朝の三時であるにもかかわらず、遠くの大通りには車が随分と走っている姿を目にする。また、ホテルから斜め前方にある大きなビルを眺めると、電気が明々と灯っており、数名のビジネスパーソンがスーツ姿で働いている光景を見る。こんな時間に働いていることに驚かされるが、彼らは夜勤か何かなのか、それとも投資銀行の株式部門で働いている人たちなのだろうか。いや、そもそも今日は土曜日のはずなのだが。

窓を開け、再びデスクの前に向かっていると、このホテルの部屋の香りが、母方の祖母の家の香りと非常に似ていることに改めて気づいた。それはとても懐かしい香りであり、記憶に定着した忘れることのできない香りでもある。香りというのも音楽と同じであり、私たちの深層にまで染み渡っていくものであり、思い出深い香りというのは消えることはないのだろう。母方の祖母の家の香りを思い出しながら、今朝方の夢について振り返っている。

今朝の夢も随分と断片的であり、それほど鮮明なものではないのだが、覚えている範囲のことを書き留めておきたい。夢の中で私は、大学入試の数学に向けた勉強をしており、問題を嬉々としながら解いていた。数学の多種多様な分野を行き来しながら、様々な問題に触れることそのものが面白く、難問を考えながらそれが解けたときの喜びにしばしば浸っていた。現実世界の私は、実は昨夜

に、大学入試で出題される整数及び数列の分野を、今後気分転換に学習するのも悪くないと思っていた。

それは悪くないというよりも、整数と数列の分野に関する理解を深めることは、どこか作曲につながるものがあると感じ、近々本格的にそれらの分野の勉強を始めるかもしれない。以前であれば、発達科学の研究と密接に関係している微積分が、私にとって最も面白い分野であったのだが、今は発達現象の科学的な研究を学術機関で自ら行うことに対する関心は薄れ、微積分をさらに学ぼうという意欲はほとんど無い。一方で今は、作曲をするという観点から整数と数列、さらにはそこに幾何学を加え、三つの分野を自分なりのペースで学びたいという思いが芽生えている。そうした学習はフローニンゲンに帰ってから開始するかもしれない。

数学に関する夢を見た後、次の夢の場面では、ロシアに出かけていく夢を見ていた。実際にロシアの大地に足を踏み入れていたわけではなく、これからロシアに向かっていくための準備をフローニンゲンの自宅で行っていた。今朝方はそのような夢を見ていた。リスボン:2019/5/4(土)03:25

4311.【バルセロナ・リスボン旅行記】形を音に・音を形に

気がつけば起床した午前二時半から四時間半が経っていた。それでもだ今は午前七時前である。ホテルの自室の窓を再び開け、再度早朝の新鮮な空気を取り入れている。辺りはすっかり明るくなり、リスボンの街もこれから本格的に動き出すであろう。

昨日までは金曜日であったこともあり、今日からの土日の休日は、また違ったリスボンの表情を見せてくれるのではないかと思う。バルセロナのホテルに宿泊していた時には、小鳥の鳴き声がほとんど聞こえなかったのだが、幸いにもリスボンの今のホテルでは早朝に小鳥の鳴き声が聞こえる。フローニンゲンの自宅の周りにいる小鳥とは種類が異なるようであり、彼らの鳴き声に耳を傾けていると面白い発見がある。

今日は午前三時半ぐらいから小鳥たちが澄み渡る鳴き声を上げ始めた。今も同じ種類の小鳥たちが鳴いており、リスボンの早朝に音の花を添えている。今朝早朝の二時半に起床した際に、初等幾何を学んで作曲に活かそうとふと思った。こうした考えが突然芽生えたのは、昨日訪れた国立古美術館での体験が根源にあるかもしれない。

所蔵されている形ある作品を鑑賞している時に、自分の内側に音楽的な何かが絶えず芽生えており、形から音を汲み取り、音から形を造形したいという自分の無意識的な衝動が存在していることに気づいたのである。そこから初等幾何に行き着くところまでは飛躍があるが、そうした飛躍を直感的に埋める何かがあり、今後は幾何学を自分なりに学んでいき、それを独自の方法で作曲実践に活かそうと思う。実はこれまでも、整数や数列に関する考え方は作曲の中で応用しており、素数やフィボナッチ数列を活用した曲をすでに何回か作っている。ただし私は、完全に数学に基づいた作曲実践をしようとは考えおらず、数学を活用しながらも、絶えず数学を超えたもの、ないしは数学とは相容れないものを曲として表現したいと思う。

今日はこれから再び作曲実践を行い、作曲上の写経実践を行っていく。今日は昼過ぎからリスボン海洋水族館に行く。事前にチケットをオンラインで購入しておきたい。

今日も気温が高く、最高気温は27度まで上がるとのことなので、水族館でくつろぐのは名案だろう。明日は最高気温が23度であり、最低気温は14度になり、比較的過ごしやすいため、明日は予定通り、ファド博物館とシアード美術館に足を箱ぶ。幸いにも明後日も気温が快適であり、最高気温は21度、最低気温は14度であるから、午前中にグルベンキアン美術館に足を運び、午後からは世界遺産巡りとして、ジェロニモス修道院やベレンの塔に足を運ぼうと思う。

今日も適度な空腹感を抱えながら、それを幸福感として感じながらリスボンの街で過ごす。昨日美術館で鑑賞した、一人の飢えたキリスト教者の恍惚とした表情を思い出す。あれは空腹を通り越し、脳と意識の変容により、一種の超越的認識世界にいるかのような表情であった。あの絵のモチーフの人物の顔を時々思い浮かべながら、今日もリスボンの街を歩くことになるのだろうか。

雲ひとつないリスボンの空に太陽が昇り、一日が本格的に始まろうとしている。リスボン：2019/5/4（土）07:09

No.1914: Serenity on a Sunday Morning in Lisbon

The morning on the fourth day in Lisbon came. The weather is also fine today, which makes me have a feeling that today will be fulfilled. Lisbon, 07:59, Sunday, 5/5/2019

4312.【バルセロナ・リスボン旅行記】仮眠中のビジョン：「ありがとう」の発音

今日もまた本当に天気が良い。リスボンの街は、ただでさえその本質に陽気さを持っているのに、雲ひとつない晴天となれば、その陽気さは極限を迎える。

つい今しがた仮眠を取り終え、これから着替えてリスボン海洋水族館に向かいたい。最寄り駅からは7分間隔で水族館の近くの駅までの地下鉄がやってくるため、全く焦る必要もなく、準備ができたら出発すればいい。仮眠を取っている最中に、目覚める直前の数分間において夢のようなビジョンを見ていた。その中で私は、リスボンのような街にいて、ポルトガル語に囲まれながらスーパーで買い物をしていた。

必要なものを購入するためにスーパーの中を歩いて回っていると、場所がスーパーではなく、レストランに変わった。先ほどまではポルトガル語が行き交うスーパーだったのだが、今度のレストランでは日本語が飛び交っていた。店員も客も、多くは日本人のようであり、そこにポルトガル語が行き交う余地はほとんどないように思えた。私は通りかかった店員に声をかけ、注文をお願いした。

何を注文したのかは覚えていないが、軽めの食事だったように思う。その他にも、ビジョンの中に友人が現れ、彼らと何かについて意見交換をしていたのを覚えている。意見を交換していたテーマは大したものではないように思えたが、私はできるだけ真剣にそのテーマについて考え、自分の考えを友人に伝えていた。それともう一つ覚えているのは、そういえばスーパーの中で、前職時代の三人の女性の上司が買い物をしており、三人に後ろから声をかけたのを覚えている。三人は、一つのカートを引きながら、野菜か何かを購入しようとしていた。私が三人に声をかけると、私がその場にいることを上司たちは一瞬驚いていたが、そこからは少しばかり立ち話をして別れた。そのような断片的なビジョンを見ていたことを覚えている。

毎回ホテルに宿泊するたびに思うが、毎日部屋を綺麗にしてもらう必要はなく、多くても二日に一回で十分である。だが、サービスのハーブティーと日本茶のティーバッグや、トイレットペーパーなどを貰いたかったため、清掃員の方が隣の部屋で働き始めたタイミングを見計らって部屋のドアを開けたところ、偶然にその方と目があったので、ティーバッグとトイレットペーパーを受け取り、一応タ

オルを交換してもらい、さらにはゴミを捨ててもらった。ベッドメイキングに関しては不要だったので、その旨を伝えた。

現在リスボンに滞在している最中は、最低限の挨拶だけはポルトガル語で行うようにしている。だが私は滞在三日目にして、清掃員の方とのやり取りを通じて、ポルトガル語の「ありがとう」という言葉を間違えて発音していることに気づいたのである。「ありがとう」を、音楽用語の「オブリガート」のように、“t”の音で発声していたことにようやく気付いた。正しくは、「オブリガード」と“d”の音で発音しなければならない。今日はこれから水族館やレストランを訪れる機会があるので、そこで早速正しい発音で「ありがとう」をポルトガル語で伝えたい。

今から着替えて、いざリスボン海洋水族館に向けて出発だ。リスボン：2019/5/4（土）12:16

No.1915: A Pure Flow

The temperature is gradually increasing. I’m thankful that I can do some sightseeing in this beautiful weather. Lisbon, 10:08, Sunday, 5/5/2019

4313.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン海洋水族館を訪れて

つい先ほどホテルの自室に戻ってきた。時刻は夕方の六時半を迎え、リスボンの空に夕暮れの太陽が輝いている。

この三日間連続して、ビュッフェ形式の同じレストランに通い、様々な野菜を大量に食べている。今日も満足の行く量を食べて、腹ごなしにゆっくりと30分ほど歩いてホテルに戻ってきた。明日は少しレストランを変えてみて、近くのオーガニックスーパーに併設されているレストランに行き、そこで持ち帰りができれば二つの種類のサラダを二人前注文しようと思う。

今日は土曜日だからか、ホテルの周りが平日以上に静かであり、リスボンの町全体も休日の良き雰囲気を醸し出している。休日のバルセロナの街も落ち着きと趣があったが、私はリスボンの落ち着きの方がさらに好きである。

今日は昼前に仮眠を取って、正午過ぎにホテルを出発し、リスボン海洋水族館に足を運んだ。ホテルの最寄駅から水族館の最寄駅までは電車で10分ちょっとであり、駅から10分ほど歩いたところに水族館がある。水族館は、ポルトガルを代表する大河であるテージョ川のほとりに建設されている。駅から水族館までの道のりは大変心地よく、海の上を架ける橋を渡っていく時の潮風がなんとも言えなく心地よかった。また、私は潮風の香りを嗅ぎながら、地元の瀬戸内海の海を思い出した。リスボンの海も実に穏やかであり、瀬戸内海の穏やかさを彷彿とさせ、磯の香りはなんとも言えず心を落ち着かせてくれた。

水族館を訪れたのは本当に久しぶりであり、前回訪れたのがいつか覚えていないほどである。大阪に勤務していた時に、海遊館に行ったような気がするが、それ以来だろうか。

結論から述べると、リスボン海洋水族館を訪れて大正解であった。多様な海洋生物たちを眺めることがこれほどまでに癒しをもたらすとは思ってもいなかった。それは想像以上の癒しであり、生命をじっと観察することによって、その生命と同化するかのような感覚があり、目の前の生命の時間の流れを追体験するかのような感覚があった。

サメやマンボウなどの大きな魚、タツノオトシゴなどの珍しい生物、愛らしいラッコ、多彩な色をした熱帯魚など、実に多様な生物がそこにいて、それぞれの生物が各々の人生を生きていた。その姿をぼんやりと私は眺めながら、時に自己を忘れるかのように生物たちを食い入るように見つめ、時に彼らの生き方から自らの人生を省察する機会を与えてもらい、実に多くのことを彼らから享受したように思う。

今回水族館の良さ、あるいは生物を眺めることの魅力を改めて実感したため、今後の旅においては水族館やたまには動物園に行ってみるのも良いと思った。美術館や博物館だけではなく、生命に触れ、生命を観察する機会を今後の旅には意識的に取り入れていこうと思う。

様々な海洋生物から得られた恩恵は、明日以降の旅をさらに充実したものにさせてくれるだろうし、フローニンゲンに戻ってからの私にも継続的な影響を与えてくれるように思う。生命は本当に偉大な存在だ。リスボン：2019/5/4（土）18:45

© YOHEI KATO 2019

No.1916: I Want to Say “Obrigado”

The fifth day to stay in Lisbon began. In the early morning, I was captured by the feeling that I want to say “obrigado” to the world and to letting me live here and now at every moment in my life. Lisbon, 07:30, Monday, 5/6/2019

4314.【バルセロナ・リスボン旅行記】抑圧された後悔と作曲実践

つい今しがた入浴を終え、今日の疲れを癒した。実際には、今日はそれほど歩いたわけでもなく、疲れという疲れは溜まっておらず、むしろ今回の旅は一日に一食しか食べていないため、消化にエネルギーを使う必要がない分、疲れ知らずである。そんな中、今日も浴槽に浸かってゆったりとしていた。

時刻は午後十時を迎えようとしており、そろそろ就寝に向けて準備を始める。明日の予定としては、ファド博物館とシアード美術館の二つを訪れようと思っており、どちらも互いに近くにあり、両者間は歩いていける距離である。まずは明日の正午過ぎに、ホテルからファド博物館まではバスを使って行く。ファド博物館とシアード美術館はそれほど大きな施設ではないとのことであり、どちらも所要時間を1.5時間ほど見積もっている。おそらくどちらかと言えば、シアード美術館の作品を鑑賞することの方により時間を充てるだろう。

本日にて、早いものでリスボン滞在目の三日目を終える。本日を終えるに際して、今日一日を大雑把に振り返っている。今日も早朝の二時半から日記を執筆したり、作曲実践を行ったり、写経実践を行うことをしながら午前中を過ごしていた。その後仮眠を取ってから、リスボン海洋水族館に足を運んだ。そうしたことを考えると、今日もやはり密度の濃い一日であったことを実感する。ただし、作曲実践と写経実践については、より密度を濃くしていきたいと思う。その方法に関して、入浴をしながらあれこれと考えていた。今回の旅の最中、なぜだか私は、再び大学入試の数学の問題を解くことに関心を持っている。

これまで塾で高校生を相手に数学を教えていたこともあるし、発達科学の研究者になってからもとりわけ研究に微分の考え方を活用して、発達現象のモデリングを行うことがあった。また大学時代を

振り返ってみると、私が卒業した大学は文系大学なのだが、大学二年生まで数学が必修となっており、大学数学の基礎を学んでいた。今も当時大学で使っていたテキストが実家にあると思うのだが、改めて大学数学を学ぶというよりも、大学入試の問題を気晴らしに解きたいというような気分になっている。いやより厳密に言えば、私の無意識に抑圧された感情がそれを促している。

バルセロナの滞在中に気づき、そして今日リスボンのホテルで入浴中に改めて思ったのだが、どうやら私は、数学の入試問題を網羅的に解く形で青春をもう一度過ごしたいという気持ちが抑圧されているようなのだ。それは一つの後悔だと言えるかもしれない。高校生の時に、もっとひたすらに数学と向き合っていたかったという思い、数学の問題をとことん考え抜き、問題を無数に解いていく快感の中で青春を過ごすことをしなかった自分に対する後悔がどうやら残っているらしい。

二年前にオーストリアのザルツブルグを訪れた時に得られた啓示的な体験によって、私は音楽知識がゼロの状態から作曲を始めた。実はその背後には、上述の抑圧された後悔の念が存在しているのではないかと思えてくる。残念ながら、私たちは時計の針を巻き戻すことはできない。私の場合で言えば、高校の青春時代に数学ともっと真剣に向き合えたはずだという後悔の念がいくらあっても、あの時に戻ることはできない。おそらく私はこの抑圧された後悔を作曲という芸術活動に昇華させ、抑圧された感情そのものと向き合い、作曲実践を日々前に進めていっているのだと思う。リスボン:2019/5/4(土)22:06

4315.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在四日目の朝に

昨夜は珍しく、夜の10時を過ぎても調べ物をしており、就寝が11時になってしまったので、今朝の目覚めは4時とゆったりとしたものだった。リスボン滞在の四日目はゆったりとした起床から始まり、今日もゆっくりとした時の流れの中で過ごしていくことになるだろう。ゆっくりとした起床と言っても4時に起き、今このようにして速やかに一日の活動を始めることができたのであるから、今日も自分のライフワークに十分に取り組みながら、それでいて旅を満喫することができるだろう。

確かに私は今、旅の空の下にいるのだが、もはや旅をしているという感覚はさほどない。確かに旅が持つ非日常性というのは常に存在しているが、旅と日常生活の境界線が溶解し始め、両者が調和をし始めているように感じる。

旅が非日常性を有しながら日常生活になり、日常生活は日常性を維持しながら非日常になる。そのような変化が見られる。今日も午前中いっぱいは、フローニンゲンでの生活と何ら変わらず、自分のライフワークに取り組んでいく。

昼前に仮眠を取り、目覚めてから、ファド博物館とシアード美術館に足を運ぶ。以前ファドについて簡単に触れたが、ここで再度触れておくと、ファドとは、ポルトガル発祥の民族歌謡である。リスボンの街を歩いていると、レストランの看板などにファドの絵や写真が飾られており、食事を楽しみながらファドの演奏を聴くことができる店をよく見かける。ファドは19世紀前半にリスボンで生まれたらしく、今でもそれは演奏され続け、人々に親しみ続けられている。

音楽学的な観点からすると、ファドは一般的にドリアンモードとアイオニアンモードを活用することに特徴があるそうだ。独特のポルトガルギターやクラシック・ギターを使う音色、そしてそこに人の歌声が乗せられたファドの音楽とはどのようなものかを、博物館に足を運ぶことによって深く知りたいと思う。

そもそも「ファド」という言葉は、「運命」や「宿命」を指しており、今回私がファドに関心を示したのも、何かの運命であり、宿命だったのかもしれない。ファド博物館を訪れたら、その足で近くのシアード美術館まで歩いていく。シアード美術館は、近代から現代にかけてのポルトガル出身の芸術家の作品を中心に所蔵しているが、それだけではなく、ロダンの彫刻といった作品も見どころとして挙がっている。夕方までシアード美術館でゆっくりと過ごしたら、今日からはもうビュッフェ形式のレストランに行くのではなく、オーガニックスーパーで果物とサラダを購入して、それをホテルの自室に持ち帰って夕食にする。

気がつけば早いもので、リスボンに滞在するのは実質上あと二日となり、夕食を摂るのは今日と明日の二回だけとなった。今日の夕食は、イチゴと豆腐サラダにしようかと考えている。ビュッフェ形式であれば様々な野菜を摂ることができるのは良いが、これまで足を運んできた店の野菜はおそらくオーガニックではない点と、やはりビュッフェ形式のためか食べ過ぎてしまうので、今日からはオーガニックスーパーで購入したものをホテルの自室でゆっくりと味わう。レストランで早めに夕食を摂っても、少々食べ過ぎてしまうことから、ある程度食べ物が消化されてからいつも入浴するようにしていた。それが結果として入浴を遅らせてしまうことにつながっていたので、今日からは再び、夕食前

に入浴し、入浴を終えてからホテルの自室でゆっくりと持ち帰った果物とサラダを食べるようにしたい。

リスボンで迎える日曜日がゆっくりと始まろうとしている。リスボン：2019/5/5（日）04:44

No.1917: A Dance in Lisbon

In the afternoon, I'll visit the Calouste Gulbenkian Museum, the Jerónimos Monastery, and the Belém Tower. I look forward to the sightseeing on the last day to stay in Lisbon. Lisbon, 08:32, Monday, 5/6/2019

4316.【バルセロナ・リスボン旅行記】オーケストラに所属し、脱退する夢

リスボン滞在の四日目は日曜日である。時刻は四時半を過ぎ、今ホテルの自室の窓を開け、小鳥の鳴き声に耳を傾けている。

昨日は土曜日であったからか、就寝前まで近くのレストランから音楽がかすかに聞こえてきて、少し賑やかな印象を持った。だが幸いにも、私が就寝する時間を迎えると、ピタリと音楽が止み、今日も良質な睡眠を取ることができた。

ここ最近は夢を振り返るのが起床してからしばらく経ってからになっているので、今日は今から夢の振り返りを行っておきたい。夢の中で私は、学校のような建物の屋上にいた。その日は晴天であり、屋上には多くの外国人の学生がいて、全員でオーケストラの練習をしていた。私もオーケストラの一員のようなのだが、楽器の演奏経験などまったくない私がオーケストラなどにいて大丈夫かと少し心配になっていた。

だが、周りの学生たちが楽しそうに練習をしている姿を見ると、仮に音楽経験が一切なくても、この場にいることに対して不安になる必要などないと思い始めた。しばらく学生たちだけで練習をしていると、途中から、中学校時代にお世話になっていた音楽の先生が姿を現した。いや、よくよくその人を見ると、お世話になっていた先生とは微妙に違う人であった。どことなく見覚えのあるの顔なのだが、その人の名前を思い出すことができなかった。いや、記憶の中の誰か二人の女性教師が混ざり合い、それが一人の人間として今自分の目の前にいるように思えた。

その先生らしき人がやってくると、オーケストラのメンバーは一旦演奏を止め、先生の話に耳を傾けた。その後、最初のパートから練習しようということになった。私が担当していた楽器は、布団である。それは文字どおり、「布団（ふとん）」である。厳密には、ベッドを立て掛けたものに布団が敷かれており、その布団を叩いて打ち鳴らすのが自分の役割だった。今改めて思うと、随分と珍妙な楽器（？）だと思うが、夢の中の私、そして他の学生たちはその楽器に対して何もおかしさを感じていないようだった。

演奏の練習が再開されると、私はどこでどのように布団を打ち鳴らしていいのかが全くわからなかった。そもそも、私たちの前には楽譜がなく、仮に楽譜があったとしても、曲が楽譜のどこを進行しているのかを私は理解できないであろうから、楽譜の有無はさほど重要ではないと思うのだが、いずれにせよ、自分がどこでどのように布団を叩けばいいのかがわからないことはもどかしかった。結局、私は立て掛けられたベッドを支えたまま、一度も布団を打ち鳴らすことなく演奏が終わった。演奏を終えると、先生は他の学生たち全員に向かってねぎらいの言葉を投げかけた。

その後、後ろを振り返り、私に向かって、「そういえば、加藤君の布団の音が聞こえなかったわね」と微笑みながら述べた。その先生は確かに優しい人だと思ったが、私はこのオーケストラに所属していることがあまり心地良くなく、そもそも楽器を演奏する関心も意欲もほとんどなかったため、私はオーケストラをやめることにした。

オーケストラへの参加は、音楽の単位と紐付いたものであり、オーケストラを止めることは即、音楽の単位を落とすことを意味していた。先生は私に対して、「それともう一つ、前回の課題の提出が今日までだけど、加藤君の課題がまだ提出されていないようよ。今日中にアシスタントに課題を提出しておいてね」と述べた。課題に取り組むこと、そしてそれを提出することがひどく面倒くさく思われたため、昼食を摂り終えたら、音楽のクラスの履修を撤回しようと思った。そこで夢から覚めた。

上述の夢以外にも、学校のトイレの中にこもる夢の場面があったのを覚えている。それは確かに学校のホテルなのだが、オフィスビルにあるような比較的綺麗なトイレであり、最初私は、空いている個室がないかどうかを確かめるために、その場にかがみこんで、人の足が見えるかどうかを確認していた。すると、全ての個室が空いており、私は自分が最も良いと思う場所の個室に入って便座に

腰掛け、しばらく考え事をしていた。そのような夢も見ていたことを覚えている。リスボン：2019/5/5（日）05:11

No.1918: Heavenly Lisbon

Today is the last day when I can spend blissful time in Lisbon. Thus, I'll enjoy doing some sightseeing as possible as I can. Lisbon, 11:08, Monday, 5/6/2019

4317.【バルセロナ・リスボン旅行記】仮眠中のビジョン

時刻は間もなく正午を迎える。リスボンの気温は今日も暖かく、良い天気の中を観光できることを有り難く思う。今日の最高気温は23度、最低気温は13度の快適な天気に恵まれている。

つい今しがた仮眠を取り終えた。仮眠中、今日は全身の身体エネルギーが活性化する現象に見舞われていた。それは金縛りにあったような感覚を伴い、全身が黄色に輝く電気エネルギーに包まれるような体験である。これは時折早朝早く起きた時や、午前中に脳をよく使った際に見舞われる現象である。

仮眠中の意識においても、この現象が生まれる直前に、この現象の訪れを感じており、充満する電気のようなエネルギーが流れ始めた時は、それに抵抗せず、ただその感覚の中に浸るようにしていた。ちょうどこの現象が生まれる前後にはビジョンを見ていた。

前半のビジョンは、私がどこかの部屋のベッド――おそらく高校時代に住んでいた社宅の自室のベッド――の上に横たわっており、幽体離脱するところを描いたものだった。ビジョンの中の自分の身体は、微細なエネルギー体と化し、それは黄色から白色に変わり、色が変化した瞬間に、私の意識と身体エネルギーは肉体から抜け出した。しばらく空中に浮かんだ身体エネルギーの中に自分の意識があり、それが収まるまで静かにしておいた。

次のビジョンにおいては、私はリスボンの街を歩いているようだった。パリやコペンハーゲンとは異なる性質を持つ石畳の美しい街並みを、私はゆっくり歩いていた。天気は本日のように晴れであり、とても平和な雰囲気が辺りを包んでいた。散歩をしていると、途中で私は歩みを止めて、一軒の楽器

屋に入っていった。そこで見たこともないような楽器を手にし、その音を奏でてみた。そこで奏でられた音も未だかつて聞いたことのないようなものだった。

私はしばらくその楽器を演奏し、音の世界に魅了され、その世界の中に浸っていた。すると私の意識は楽器屋にはなく、再びリスボンの街中にあった。ちょうど目の前には古代の建築様式で建てられた歴史を感じさせる駅があり、それを眺めながら私はその場に佇んでいた。今日はそのようなビジョンを見ていた。

ビジョンの中では、確か小中高時代の女性の友人(YY)が現れ、彼女は、これから私が参加する予定のイベント会場の場所を私に教えてくれた。だが、口頭の説明だけではよくわからなかったので、彼女が途中までついてきてくれるとのことであった。その親切心に感謝しながらも、彼女が出発に向けて携帯か財布か何かを近くの家に取り入った時、私は彼女を待たずしてその場を出発してしまった。その他にも、リスボンの街の市場で買い物をしていた場面があった。

そこではオーガニック食品が扱われており、二人の女性店員がオランダ語を話していたので、彼女たちがオランダ人であることに気づき、オランダ語で話しかけ、果物か何かを一つ購入したのを覚えている。

今日はこれから最寄り駅からメトロに乗り、ファド博物館に足を箱ぶ。その後、シアード美術館までゆっくりと歩き、この美術館を堪能したい。

今、海に近いリスボンの街にカモメの鳴き声が響き渡った。本日街中を歩いている最中に、ひょっとすると、先ほどビジョンの中で見ていたような景色と遭遇するかもしれない。リスボン:2019/5/5(日)12:03

4318.【バルセロナ・リスボン旅行記】ファド博物館を訪れて

時刻は午後の六時を迎え、先ほどホテルの自室に戻ってきた。リスボン滞在四日目の観光も実に充実していた。正午に仮眠を取り、午後からはファド博物館に足を運んできた。最初私は、事前情

報をもとに1.5時間ほどの所要時間を見積もっていた。しかし、博物館の中に入ってみると、とても小さいことがわかり、見積もりの所要時間もかからないのではないかと思った。

チケットはオーディオガイド込みで5ユーロと安く、館内は小さくてもオーディオガイドをゆっくり聴くことによって少なくとも1時間はかけて鑑賞しようと考えた。ところが館内に入ってオーディオガイドを聴き始めてみると、これまで馴染みのなかったファドに対して関心の目が一気に開かれ、結局私は当初の見積もり時間を大幅に超えて2.5時間ほどこの博物館にいた。

ファドの歴史に始まり、ファドがリスボンを拠点にしてポルトガル社会の中でどのように浸透・発展して行ったのかに大変興味を持った。また何よりも、オーディオから時々流れてくるファドの音色がクラシック音楽にはないような魅力を持っており、自分の作曲に活かすという観点から、オーディオを隅から隅まで聴いていった。

館内の途中には、有名なファド歌手の録音演奏を聴けるスペースがあり、そこでも何曲かに耳を傾けていた。そうこうしている間に随分と時間が経ち、最後は館内の小さな映画館のようなスペースで上映されていた、ファドに関するドキュメンタリー番組を見た。この番組は、ファドの歌手、そしてファドの研究者にインタビューをする形式で構成されており、一人一人のファドとの出会いや思想についての話が面白く、一度席に座ると、最後まで見なければ席を立てないほどに私の関心を引いた。

数人のファドの歌手が共通して述べていたのは、歌を歌う際に、ギターの演奏者、そして聴衆及びその場と一体になるというある種の超越体験ないしは宗教体験をしたことがあるという話であった。これはもちろんファド固有の体験ではないが、クラシックコンサートのように、ステージと観客席とに別々の結界のようなものが生まれ、二つの結界間に音が行き来することによって生まれる一体感とはまた別の一体感がファドの演奏にはあるのだろう。今回は、レストランなどでファドの生演奏を聴く機会はなさそうだが、また次回リスボン、あるいはポルトガルの他の街を訪れた際には、ファドの生演奏を聞きたいと思う。

私はもちろんクラシック音楽を好んでいるが、ブラジルのサンバやアルゼンチンのタンゴのように、大衆的な場所に発生の起源を持っているファドには固有の面白さがある。生活から生まれた音楽には、教会や宮廷などに発生の起源があるクラシック音楽とはまた違った魅力があり、その魅力に

よって受けた刺激をもとに自分の曲作りに活かしていきたい。ファドを通じて、音楽は私たちの生活の中に絶えず存在しているということを教えてもらったような気がする。

館内をくまなく見た後に、ギフトショップに立ち寄ると、そこに幸いにも、ファドの楽譜がたくさん置かれていた。およそ50種類ぐらい楽譜が置かれてあり、ピアノ曲にアレンジできそうな楽譜をいくつか見つけ、結局七冊ほど購入した。

リスボンに滞在できるのは今日と明日の二日間、そして明後日の朝だけとなったが、その期間に是非とも、本日購入した楽譜をもとに作曲を行いたい。リスボン:2019/5/5(日)18:24

4319.【バルセロナ・リスボン旅行記】作曲上の写経実践と大学入試数学の学習との類似性

時刻は午後の九時を迎え、リスボン滞在の四日目が静かに幕を閉じようとしている。つい今しがた、本日を締め括る写経実践を行った。

今回の旅の友は、メロディーに関する理論書“Melody Writing and Analysis (1960)”の一冊のみであり、今回の旅の始まりに合わせて写経実践を開始した。計画通り、明日中に本書に掲載されている全ての譜例の写経実践が終わりそうだ。もし明日に終わらなければ、明後日フローニンゲンに戻る際の移動時間にも実践を行っていきたい。作曲上の写経実践をしていると、大学入試に向けた数学の勉強のことを思い出す。

私は一応日本の教育においては文系に括られ、文系の大学に進学したが、高校時代に最も好きな科目は数学であった。入試に向けた勉強の息抜きや楽しみとして、数学の問題を解くことがあった。作曲上の写経実践は、当時数学の問題を解いていた頃を懐かしく思い出させる。今私が思うのは、おそらく数学の問題を解くこと以上に写経実践が面白いということである。

その背後にはもちろん、この写経実践がこれからの自分の作曲技術の土台を構築していく上で非常に重要な役割を担っているからであり、同時に、数学の問題を解くこと以上に、実際に曲の断片が姿を現し、そこから身体感覚を強く刺激する実際の音が生み出されることに楽しさや喜びを見出していることが挙げられる。ただし繰り返しになるが、成人になった現在行っているこの写経実践に

伴う喜びと楽しさは、高校時代に数学の問題を解いていた時に味わっていたものと非常に似ているということだ。そうした共通点に気づかせてくれたのが写経実践だった。

この実践のアイデアは以前から生まれていたのだが、それを行う必要性を強く感じ、本格的にそれを始めたのはほんの先日のことである。そのため、今は色々と模索しながらこの実践を行い、実践から得られた気づきをもとに色々と工夫や修正を施している段階である。

作曲の技術を高めていく学習やトレーニングと、大学入試に向けた数学のそれらは少しばかり違いがあるのは確かだ。そもそも作曲の技術を高めるための理論書や実践書は、日本の大学入試における数学の参考書や問題集のように多くない。というよりも、日本語文献においてはほとんど良いものがなく、英語に関してもそれほど数は多くない。しかし現在手持ちの理論書を眺めてみると、大学入試に向けて数学の学習を進めていた方法を応用させることが十分に可能であると遅まきながら気づいた。

私は過去に高校生一年生から三年生に塾で数学を教えていたことがあり、その時の経験も活用しない手はない。私の受験生時代からあった『青チャート』は、現在手持ちの書籍で言えば、ウォルター・ピストンの“Harmony (1978)”に対応するように思う。『青チャート』は、網羅性のある問題集として定評があり、上述のピストンの書籍もハーモニーに関して網羅性がある。厳密に言えば、ピストンの書籍はハーモニーしか扱っていないため、数学で言えば微積分やベクトル、あるいは確率などの一単元しか扱っていないようなものなので、二つの書籍を直接結びつけることはできないが、書籍の分厚さと例題（譜例）の豊富さが似ているように思う。

フローニンゲンに戻ったら、まずは『青チャート』に例えられるピストンの書籍の譜例を徹底的に写経していこうと思う。一つ悩みどころとしては、チャート式の例題を理解しながら解いていくように、解説を読みながら譜例を写経していくのが良いのか、それとも一周目は解説を読むことなしに、作曲ソフト上に音符を打ち込み、それを何度も繰り返し聞くだけに留めて、頭をできるだけ経由せずに身体感覚を通じて学習していくことの方が良いのかどうかという点である。これはどちらも一長一短あり、判断が難しいので、実際にフローニンゲンの自宅に帰って本書を開き、二つの案をどちらも試してみようと思う。

ピストンの上述の書籍の譜例に対する写経が全て終わったら、もちろん何度も繰り返し同じ数学の問題を解いて数学力をつけていくのと同様に、本書の譜例に関しても繰り返し写経をしていく予定なのだが、より専門的な単元を扱う書籍に対しても写経を行っていく。例えば、チャイコフスキーのハーモニーに関する書籍“Guide to the practical study of harmony (2005)”は、ピストンの書籍よりも解説が少なく、少し応用的であるように思われるため、ハーモニーの発展学習として取り組むのが良いだろう。

また、対位法に関するピストンの書籍“Counterpoint (1947)”やヨハン・ヨーゼフ・フックスの古典的名著“The Study of Counterpoint: From Johann Joseph Fux's Gradus Ad Parnassum (1965)”は、整数問題の対策に使っていた名著『マスター・オブ・整数』に対応するように思える。さらには、アルフレッド・マンが執筆したフーガに関する書籍“The Study of Fugue (1958)”やマックス・レーガーが執筆した転調に関する書籍“Modulation (2007)”も『マスター・オブ・整数』ないしは、『1対1対応の演習』の各単元に該当するような応用的なものだと言えるだろう。

その他には、ショーンバーグが執筆した作曲理論全般に関する“Fundamentals of Musical Composition (1967)”は、『良問プラチカ』に対応すると言えるかもしれない。いずれにせよ、そうした作曲の理論書を繰り返し写経する際には、音楽生成上のパターンを身体に染み込ませ、身についたパターンを自由自在に組み合わせながらその場で自由自在に活用できるようにしていきたい。明日からの写経実践においてもその辺りを常に意識する。リスボン：2019/5/5（日）21:47

4320.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在五日目の朝に思うこと

今朝は比較的ゆっくりと五時前に起床した。このところは二時半や三時あたりに起床していたため、随分ゆったりとした起床である。起床直後にシャワーを浴び、今は午前五時半を迎えようとしている。いつものように換気として窓を開けてみたところ、早朝の闇の世界に小鳥たちの澄み渡る鳴き声がこだましていることにすぐ気付いた。フローニンゲンの自宅周辺にいるのと同じ種類の小鳥たちが美しい鳴き声を発し、それがまるでシャワーのように地上に降り注いでいる。

正直なところ、今回の旅においてフローニンゲンを出発したのがいつだったか思い出せないぐらいに前のことのように感じる。今回は12日間の旅であり、数字だけ見るとそれほど長く感じさせないの

だが、出発の日の朝が随分と前のように感じる。そうしたことを感じる時がちょうど旅の終わりとしてふさわしいのか、明日の朝にはリスボンを出発し、夕方にフローニンゲンの街に戻る。フローニンゲンに戻ったら、再び新たな生活が始まる。それは、旅を始める前のものとは同じでありえない。なぜなら旅は人を変えてくれるからである。それが本質的な旅であればあるほど、それは私たちを変えてくれる。もはや旅の前の景色を見ることはできず、旅が終わった後に見えるのは新たな景色である。フローニンゲンに戻ってからの景色は、必ずや新たなものになるだろう。

今回バルセロナとリスボンで宿泊した両ホテルは、ともに快適であった。確かに、バルセロナのホテルでは、周りの迷惑を顧みないおかしな客が宿泊していたこともあったが、総じてホテルには満足している。また、食事に関しても、両都市には良いオーガニックスーパーやレストランがあり、一日一食生活を送る際に鍵となる一回の食事の質と量に関しても満足している。

今回の旅は、満足感の高いまま進行して本日を迎えたが、そろそろホテルの椅子に座るのではなく、バランスボールに座って自分の取り組みに従事したいという思いになる。それは思いというよりも、身体からの願いのようなものである。一日に長時間椅子に座ることは、過食と同様に心身を劣化させていくことは明らかであり、バランスボールのように、目には見えないところで絶えず身体の内側の筋肉を揺れ動かしている道具を使いたいと願う自分の身体の要求も理解できる。

リスボンの滞在も今日で五日目を迎え、旅全体としては11日目を迎える。自分の身体がバランスボールを欲し始めたことに加え、早朝の味噌汁も恋しくなってきた頃である。

明日の夕方からフローニンゲンに戻ったら、新たな心身を持って日々の仕事に取り組んでいこうと思う。今年は全体としてこれまで以上に充実したものになるとすでに予感している。様々な協働プロジェクトを無理のない範囲で進めていき、自分の創造活動や探究活動にも激しく打ち込んでいく。激しさが溶けてしまうぐらいに激しい活動が進行していくだろう。そうした日々の生活に並行して、旅にも積極的に出掛けていこうと思う。数日前にふと、イタリアが近づいてきたことを感じた。

特にローマやフィレンツェの街が自分に接近してきているのを時間する。イタリア以外には、六月の半ばあたりにジョージアの首都トビリシに足を運ぶかもしれず、また、夏にはロシアのモスクワに滞

在することを計画している。ライフワークと旅が交差し始め、二つが新たな一つのものに変貌を遂げようとしている。リスボン：2019/5/6（月）05:42